



922

講談社現代新書

シャーロック・ホームズの の

推理学



初体面の相手と握手をした瞬間、どこから来たか、何者かを、ホームズは常に見抜いていた。快刀乱麻の洞察は、想像力を駆使した「成功の確率を高める」方法に支えられる。

ホームズのめまぐるしく動く頭脳の内部へ誘い、
真実解明への論理過程を
あざやかに解きほぐす。

内井惣七

シャーロック・ホームズの推理学

一九八八年二月二〇日第一刷発行

定価——五二〇円

著者——内井惣七

©Sôshichi Uchii 1988 Printed in Japan

発行者——加藤勝久 発行所——株式会社講談社

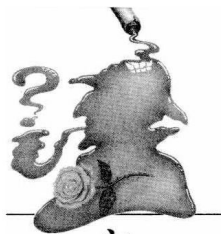
東京都文京区音羽二丁目三—三 郵便番号二二—〇二 電話二三—九四五—一一二二

装幀者——杉浦康平＋赤崎正一

印刷所——凸版印刷株式会社 製本所——株式会社大進堂

ISBN4-06-148922-4(0)

落し本・乱丁本は、小社書籍製作部あてにお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。
なお、この本についてのお問い合わせは、学芸図書第一出版部あてに願います。



シャーロック・ホームズの推理学

内井惣七

講談社現代新書

シャーロック・ホームズの推理学／目次

プロローグ

1—ホームズは「論理学者」か.....	10
ロンリー警視、ワトスンをこきおろす／シービオク「シャーロック・ホームズの記号論」 について	

ホームズと確率論的方法

2—ホームズとワトスンとの出会い.....	22
ホームズの推理はどんな推理か	
3—観察力.....	27
どうやって本質を見抜くか	
4—観察と推理.....	31
観察すると.....／そして推理	
5—消去による推理.....	35
演繹的消去がまず考えられる／しかし消去による帰納という手もある	
6—消去による帰納.....	40

ミルの帰納の規則はハーシエルに由来する／ホームズの方法は消去による帰納か

7	剰余法	47
---	-----	----

「ありそうか、なさそうか」の判断

8	ミルにおける帰納、演繹、仮説	52
---	----------------	----

くり返して確認する／証明法としての帰納／演繹的方法——人間の計算結果を事実と突き合わせる／仮説法——人間が仮想した結果を事実と突き合わせる／ミルとホームズの違い

9	ホームズと確率論的方法	59
---	-------------	----

古典的方法論——確実な知識をめざす／確率論的方法論——確からしい知識をめざす

10	分析と総合	66
----	-------	----

デカルトの分析と総合

11	逆方向の推理	71
----	--------	----

帰納推理とは確率の比較である／確率の逆算法

12	確率論的科学観	77
----	---------	----

ホームズは統計的方法によく通じていた／無限の抽選箱

ホームズの推理の諸相

- 13 — 仮説形成……………86
想像力——目で七つの仮説／知識、観察、要因分析／手がかりから仮説へ
- 14 — 仮説形成の論理……………96
類推と類の識別／多様性の統一——「尾根裏部屋の道具箱」／類の推定——「規則性を好む傾向」
- 15 — ヒューウエルの帰納論……………104
ヒューウエルの科学論／概念の解明——道具立ての整備／概念による事実統括——法則の出現／検証および帰納の統合——より広く、より単純に／パターンの発見と暗号解読
- 16 — 部分から全体へ……………114
相関の原理——キュヴィエの「神話」／理想的知識——完璧な屋根裏部屋／複合的推理による全体の復元／推理の相乗作用
- 17 — ホームズの複合的推理……………124
暗号解読の推理／仮説の発想と仮説からの推論／考察に値する仮説／確率論的検証

18	—ホームズの論理的センス……………	132
----	-------------------	-----

論理的なセンス／論理的皮肉／ホームズの自己規制／ホームズの論理的演出／論理的な
 切り返し／集中力／ベリーの論理パズルの解答

19	—結論……………	149
----	----------	-----

ホームズとダーウィン

20	—進化論と科学的方法論……………	154
----	------------------	-----

ダーウィンと「帰納的方法」／「種の起源」をこきおろした著名な人々／「種の起源」を読ま
 ずに一席ブツ方に／ダーウィン説の特徴

21	—ホプキンスのダーウィン批判……………	163
----	---------------------	-----

科学はひとつ、方法は共通／進化論は科学の規則を満たさない

22	—蓋然的仮説としての進化論……………	170
----	--------------------	-----

カーペンターの書評——新概念による生物学の統括／フォーセットの書評——蓋然性の

計量／フツカーの書評——複數仮説の優劣比較／ピクテの書評——直接的証明と間接的証明／ミルのダーウイン評——ミルは「自然選択」を理解したのか？

23—確率論的方法と進化論——

「状況証拠というやつは非常に微妙なものでね」／「確率を秤にかける」／「どんなときにも、ほかの可能性を考えて」

あとがき……

●
フ
ロ
ロ
ー
グ



1—ホームズは「論理学者」か

「ただ一滴の水から」と筆者は言う。「論理学者は大西洋やナイアガラ瀑布^{ばくふ}を見たことがなくとも、それらが存在しうることを推論できるであろう。同様に、人生もまた大きな一連の鎖であり、われわれはその環の一つを示されると、全体の本性をも知ることができるのである。他のあらゆる学芸と同じく、推論と分析の学も、長く辛抱づよい研究を積み重ねることによってのみ修得できるものであり、しかも、この学問の最高の域に到達するためには、一生を費やしても十分とはいえない」——『緋色の研究』第一部、第二章

（引用文は、原則として『シャーロック・ホームズ大全』鮎川信夫訳、講談社、一九八六の訳を用いるが、ここの文のように、原典を参照して、わたしの責任で語句や言い回しを変えるところが多い。）

一九八七年は、シャーロック・ホームズ物語発表百周年であり、ホームズをめぐるさまざまな書物が出版されている。しかし、当のホームズが最も重きをおいた推理の理論、つまり論理学に関する研究書がほとんど見当たらないのはどうしたことだろうか。ワトスン博士がホームズとベイカー街二二一Bで同居生活を始めた最初の頃に、ホームズが雑誌に発表した「人生の書」という論文で、ホームズはみずからを「推論と分析の学 Science of Deduction and Analysis」を究めようとする「論理学者 logician」であると考えているらしいのである（さきの引用文がそれを示す一節である）。

もちろん、「logician」という語をはっきり「論理学者」と訳して良いのか、と疑問を持つ読者がおられるかもしれない。また、ホームズの時代の人々が考えた論理学と現在のわれわれの考える論理学とがかなり違うということも十分考慮しなければならない。しかし、わたしの結論をはっきり言わせていただくなら、ホームズは立派な論理学者だったのであり、その点がつきりわかるような翻訳や解説をしなかった訳者と解説者は、論理学に関するみずからの無知を暴露しているのである。本書ではこの結論を論証したい。

いずれにせよ、ホームズの「論理学」に関する研究をなおざりにしたということは、いかなるシャーロックアンにとってもとても自慢できることではなからう。ホームズは、『四つの署名』

第一章で、「緋色の研究」に関するワトソンの報告のしかたについて、つぎのようにクレームをつけている。わたしは、多くのシャーロックキアンがこの言葉の重みに気付いていないのではないのかという危惧を抱いているのである。

「多少の事実は端折らなければならない。あるいは、少なくとも、事実を取り扱う時には均整というものを忘れてはいけななんだ。あの事件で物語るに値する唯一の点は、結果から原因へという興味深い分析推理によって、事件を解決に導いたということだけなんだよ」

ここでお断りしておくが、わたし自身は一介の論理学者であるにすぎず、シャーロックキアンでもホームズ研究者でもない。しかし、わたしも人なみにホームズ物はいくつか読んだことがあるし、加えて十九世紀の論理学や科学方法論を少しばかり研究したこともある。そこで、ホームズの「論理学」について、少しばかり意見を述べさせてもらう資格はあるだろうと考える者である。

ロンリー警視、ワトスンをこきおろす

なぜこのような「論理軽視」がホームズ研究においても横行しているのか、その理由はわたしにはよくわからない。そこで、この点についてわたしの友人のロンリー警視（ちなみに、彼は論理を重視する刑事なので、このような呼び名で通っている）の意見を求めたところ、つぎのような指摘をしてくれた。

「わたしにも正確な原因はわかりませんが、少なくとも一つの原因は、やはりワトスン博士にあるのではないですか。彼は、最初のホームズ物である『緋色の研究』第一部、第二章でホームズの知識の程度を評価し、文学や天文学についてと同様、哲学に関するホームズの知識は皆無であると酷評しています。ところが、論理学は哲学の一分野とみなされるのが普通ですから（十九世紀も現在も）、哲学の知識が皆無では、論理学者ではありえないと理解するのは当然ではないでしょうか。この程度の推論ならだれにでもできますね。そうすると、多くの読者がこれにつられて、ホームズと論理学とを切りはなして考えるのは、わかるような気がしますね。」

しかし、わたしの意見では、哲学の知識が皆無なのは、ホームズではなく、むしろ善良な

ワトスンのほうではないかと勘ぐりたくなりますね。彼は、どうやら、論理学が哲学の分野だということさえはつきりしていないようですから」

これはなかなか手厳しい意見である。少しワトスン博士のために弁護すれば、ロンリー警視の指摘にはもつともなところもあるが、いかにホームズが優れた推理の専門家であるといっても、優れた推理ができるということ、優れた論理学者であるということは必ずしも同じであるとは言えないのである。少なくとも、現在の意味では、論理学者というのは推論や論証の原理、つまり論理法則に関する体系的かつあからさまな知識を持つていなければならぬ。このような知識が優れた推論の能力なしには持てないということは事実であろうが、逆は必ずしも真ではないのである。つまり、ホームズのような優れた推理をする人が、常にあからさまな知識の形で論理法則を体系的に知っていると必ずしも言えないのである。

また、言うまでもなく、現実的で具体的な事例に関する推理の能力と、抽象的で一般的な論理的思考の能力とは、一致するとはかぎらない。この点については、ホームズがフランスの探偵ル・ヴィーラールを評した言葉が大いに参考になる。「彼自身、相当な才能を持つてゐる。理想的な探偵に必須の条件三つのうち、観察力と推理力はあるのだが、ただ知識に欠けている」(『四

つの署名』第一章）。探偵が必要とする、現実的で具体的な事例に関する推理力は、つねに具体的な、そして事例に必要なかぎりでの一般的な知識を持っていなければ、十分な効果を発揮できないのである。したがって、優れた論理学者が優れた探偵であるわけではない。

だから、ワトスンがホームズの哲学の知識は皆無であると言ったとき、ワトスンはあからさまで体系的な知識や、抽象的で一般的な知識しか考えに入れてなかったのかもしれない。また、know howとしての論理の知識はホームズに認めても、know thatとしての論理の知識をホームズに認めなかったのかもしれない。

しかし、このようなワトスン弁護ができるかどうかは、実際にホームズの言動を調べてからでなくてはいいないであろう。この本では、そのような試みをおこない、シャーロック・ホームズの、論理に関する能力と、あからさまな論理学の知識の程度を推理してみることにしたい。

シービオク『シャーロック・ホームズの記号論』について

なお、ここまでのわたしの言い分に対して、シービオクの『シャーロック・ホームズの記号論』（富山太佳夫訳、岩波書店、一九八二）という立派な研究がすでにあるではないか、という反論が出されるかもしれない。この興味深い仕事にケチをつけるつもりはまったくくない（ただし、